

霞ヶ浦導水事業の検証報告書素案の問題点

霞ヶ浦導水事業には次の三つの目的がある。

- ① 霞ヶ浦等の水質浄化
- ② 新規利水の開発
- ③ 流水の正常な機能の維持（利根川と那珂川の渇水時の補給）

検証報告書素案では、この三つの目的とも、現計画案が他の対策案より最も有利であると判断され、霞ヶ浦導水事業を継続することが妥当であるとの結論になっているが、この検証は現計画案が最も有利となる仕組みの中で行われたものであり、客観性、科学性が欠如している。事実を踏まえて科学的な検証を行えば、霞ヶ浦導水事業の三つの目的はいずれも意味を持たないものである。

1 「霞ヶ浦等の水質浄化」の虚構

霞ヶ浦は利根川、那珂川に比べて水質汚濁（有機汚濁物質による汚濁）が進行しているが、利根川や那珂川から霞ヶ浦に導水しても霞ヶ浦が浄化されるわけではない。それは霞ヶ浦の汚濁の大半は外からの有機汚濁物質の流入による一次汚濁ではなく、霞ヶ浦の中で植物性プランクトン（浮遊性藻類）が増殖することによる二次汚濁だからである。

この植物性プランクトンは窒素とリンを栄養源として増殖する。この窒素、リンの濃度について霞ヶ浦と両河川を比較すると、**図1**のとおり、窒素は両河川の方が霞ヶ浦よりもかなり高く、リンは利根川が霞ヶ浦より高く、那珂川が霞ヶ浦より少し低い程度であるから、両河川からの導水によって窒素濃度は逆に上昇することになり、リン濃度はほとんど変わらない。そして、**図2**のとおり、霞ヶ浦の窒素、リン濃度は環境基準（藻類の増殖を抑制できるレベル）の数倍もあるから、両河川からの導水で霞ヶ浦での植物性プランクトンの増殖が抑制されることはない。

霞ヶ浦の水質汚濁の機構を踏まえれば、利根川、那珂川からの導水で霞ヶ浦の水質が浄化されるはずがない。むしろ、導水によって霞ヶ浦の底泥が巻き上げられ、水質が悪化することが予想される。

2 「新規利水の開発」の虚構

霞ヶ浦導水事業によって茨城県、千葉県、東京都、埼玉県の水道・工業用水の新規水

源を合わせて毎秒 9.2 m³/秒開発することになっている。しかし、近年の首都圏の水道・工業用水は減少の一途を辿っている。**図 3**のとおり、首都圏 6 都県上水道の一日最大給水量は 1992～2011 年度の 19 年間に 200 万 m³/日も減少している。これは節水型機器の普及等によるものであるが、今後も節水型機器が普及し、人口も減っていくので、水道用水の減少傾向が続くことは必至である。工業用水も減り続けている。

このような水需要縮小時代において霞ヶ浦導水事業による新規水源開発が必要であるはずがない。使う当てのない水源を開発するだけである。

3 「流水の正常な機能の維持（利根川と那珂川の渇水時の補給）」の虚構

流水の正常な機能の維持という目的は、渇水時に利根川と那珂川の間で、水量に余裕がある河川から水量の少ない河川に霞ヶ浦を経由して補給するというものである。しかし、霞ヶ浦は利根川、那珂川に比べて水質汚濁がかなり進行しているので、霞ヶ浦の水を利根川や那珂川に送れば、深刻な漁業被害を起こすため、霞ヶ浦を通しての両河川への補給は現実には困難である。

実際に利根導水路（霞ヶ浦と利根川を結ぶ導水路）は 1994 年 3 月に完成し、1995 年 9 月に試験通水が行われ、霞ヶ浦の水を利根川に送水したところ、利根川でシジミの大量死が起きた。その後、**新聞記事**のとおり、試験通水は見送られており、現在も利根導水路の利用状況はほぼゼロの状態が続き、利根導水路は開かずの水路になっている。

同様に、那珂導水路が建設され、霞ヶ浦の水を那珂川に送水すれば、那珂川で深刻な漁業被害が起きることは必至である。

このように、霞ヶ浦を通して利根川と那珂川の水を相互に行き来させて、渇水時の補給を行う「流水の正常な機能の維持」は机上の計画に過ぎない。霞ヶ浦は水質汚濁がひどく進行しているため、そのような渇水時の補給は現実には困難なのである。

以上のように、霞ヶ浦導水事業の三つの目的は、いずれも虚構の上に作り上げられたものであるから、霞ヶ浦導水事業はまったく意味のない事業であり、いたずらに巨額の公費を浪費するものでしかない。さらに、那珂川のアユ等の漁業に深刻な影響を与えることが予想され、那珂川の漁協が建設中止を求める裁判を起こしているのであるから、本事業は中止すべきである。

図1 霞ヶ浦と利根川、那珂川の水質

(出典:茨城県「公共用水域の水質等測定結果」、霞ヶ浦:西浦の平均、利根川:金江津、那珂川:勝田橋)

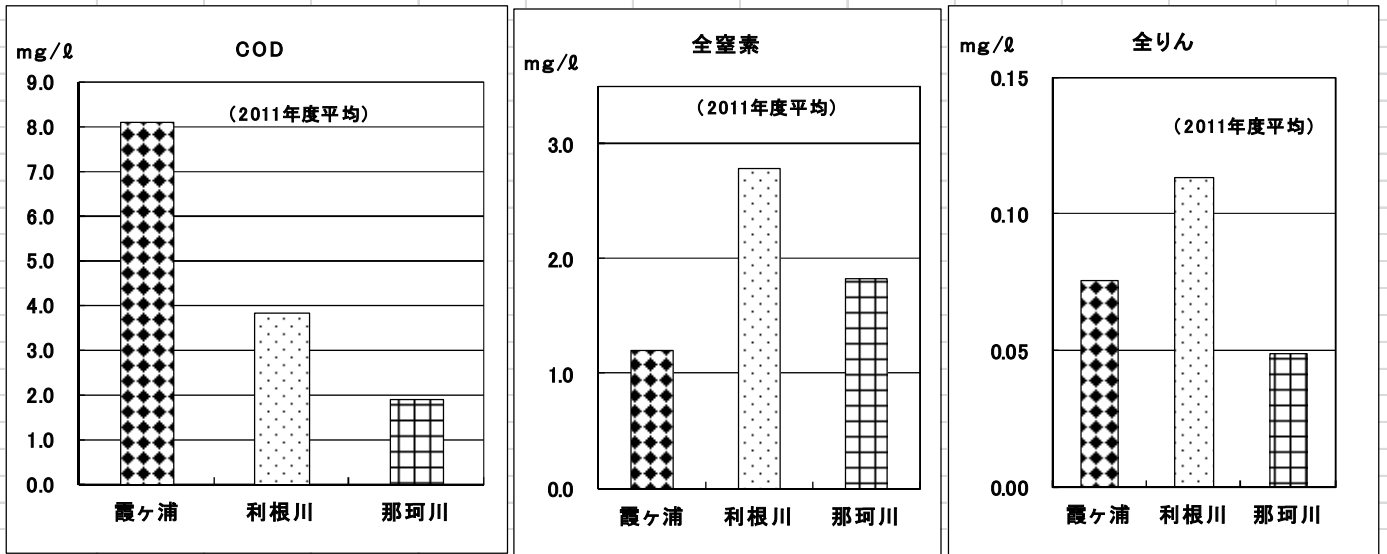


図2 霞ヶ浦の水質の経年変化

(出典:茨城県霞ヶ浦環境科学センター年報)

